冨 樫 館 跡 II

－民間開発に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

1999年

石川県野々市町教育委員会

例　　言

1　本書は民間開発に係る冨樫館跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の調査は事業者の田村昌俊氏より委託を受け野々市町教育委員会が実施した。

3　発掘調査は平成10年５月８日から５月29日にかけて実施し、布尾和史・徳野裕子・永野勝章（野々市町教育委員会文化課）が担当した。

4　発掘調査及び報告書作成には垣内光次郎氏、田村昌宏氏（石川県埋蔵文化財センター）の御指導・御協力を得た。記して感謝申し上げる。

また発掘調査の作業には以下の方々の協力を得た。重ねて感謝申し上げる。（敬称略）

現場作業　井手和郎、岩田孝七、小野幸子、小幡頼三、木津美和子、木下　光、瀬川朝子
谷口初代、田端　実、綯美保子、徳田外喜栄、中川吉三、永田芳子、橋本美智子
羽土啓子、早崎長三、東　猛、南外志雄、山本美保子、横山日出子

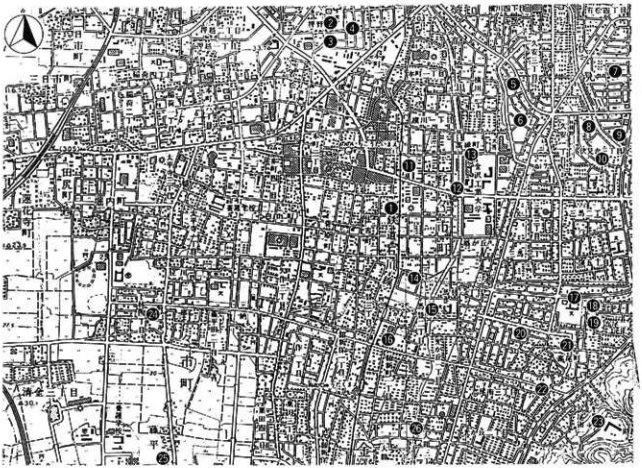
整理作業　増山明美

5　本書の編集は永野勝章が担当した。

6　第３章遺構と遺物中、（断一○）は第５図の土層断面図土色番号に対応する。

7　本遺跡の出土遺物・記録資料は野々市町教育委員会で保管している。

8　調査にあたって、事業者の田村昌俊氏には多大な御理解と御協力をいただいた。深く感謝申し上げる。



1．冨樫館跡　2．押野館跡　3．押野タチナカ遺跡　4．押野ウマワタリ遺跡
5．久安さんまい川遺跡　6．久安トノヤシキ遺跡　7．有松Ａ遺跡　8．寺地向田遺跡
9．寺地シンドロ遺跡　10．円光寺向田遺跡　11．高橋ウバガタ遺跡　12．扇が丘ゴショ遺跡
13．高橋セボネ遺跡　14．扇が丘ハワイゴク遺跡　15．扇台遺跡　16．馬替遺跡
17．高尾イシナ塚遺跡　18．高尾新マトバ遺跡　19．高尾新町遺跡　20．高尾公園遺跡
21．高尾天神堂遺跡　22．高尾Ａ遺跡　23．高尾城跡　24．三林館跡
25．栗田遺跡　26．大額キョウデン遺跡

第１図　周辺の遺跡（1/25,000）

第１章　遺跡の位置と環境

石川郡野々市町は石川県のほぼ中央、北・東は金沢市、西は松任市、南は鶴来町にそれぞれ接する南北6.7km、東西4.5km、面積13.56㎢の町である。面積は小さいものの肥沃で豊富な地下水に恵まれた平坦地のため都市型農業に適しており、昭和40年代までは田園が広がり集落の点在するのどかな風景が見られた。しかしその後北陸地方の中核都市金沢市に隣接することもあって急激な都市化が進み、今日では人口４万４千人を数える人口稠密の町となった。

第２図　野々市町位置図
(1/3,000,000)

富樫館跡はこの野々市町の東部、町役場や大小の商店・住宅の密集する本町２丁目、住吉町、扇が丘地内に所在し、今回の調査区は金沢工業大学と北陸鉄道石川線の中間、標高約19mを測る地点に位置する。

本遺跡は中世加賀守護として知られる富樫氏の居館跡に関連する遺跡で、周辺では扇が丘ゴショ遺跡、ハワイゴク遺跡など富樫氏との関係が考えられる遺跡が存在し、また北方約1.3kmには富樫系武士団押野家善の居館であった押野館跡がある。さらに南東２kmの富樫丘陵には一向一揆によって滅ぼされた富樫政親最期の地として有名な高尾城跡が所在する。

富樫館跡は江戸時代後期頃までは堀や土塁の跡が残っていたようだが（注１）、近代に入ってからの耕地整理や開発事業によってそれらも姿を消してしまった。近年、数度にわたる開発に伴う緊急発掘調査や試掘調査が行われているものの、いずれも小面積の調査ということもあって今日なお館跡の範囲は確定していないが、平成６年の調査において館跡の西側に当たる地区で館の周囲を巡る堀跡が発見されている。

（注１）館残翁『富樫氏と加賀一向一揆史料』に引く津田鳳卿「石川訪古游記」

第２章　調査の経緯と経過

富樫館跡は昭和62年（1987年）を始めとして、住宅建築などの小規模開発に伴って数件の緊急発掘調査が行われてきた。

今回の調査の原因となる開発行為については平成10年３月に野々市町教育委員会に照会があった。当該地は富樫館跡（遺跡番号16039）の縁辺部にあたることから事業者と協議して試掘調査を実施した結果、ピットや溝状遺構を確認した。これによりさらに協議を重ね、遺跡があると判断した300㎡について発掘調査の実施を決定し、平成10年４月８日事業者と野々市町教育委員会との間で受委託契約を締結した。

第３図　調査区位置図（1/5,000）

発掘調査は５月８日よりはじめ掘立柱建物１棟・土坑10基・溝４条その他ピットを検出して、５月29日に終了した。

第３章　遺構と遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ01（第４図・第５図）　調査区西側に位置する。総柱建物で、検出している部分は２間×２間であるが、さらに調査区外に伸びる可能性もある。柱間は不揃いでＰ01～Ｐ03は3.7ｍ・2.6ｍで、Ｐ22・Ｐ23・Ｐ04は3.2ｍ・3.0ｍ、Ｐ03・Ｐ21・Ｐ04は4.2ｍ・4.4ｍを測り面積は約54㎡である。柱穴は円形ないし楕円形で径は平均約40㎝、深さは10㎝～64㎝とばらつきがある。このうちＰ02・Ｐ03で柱痕跡を確認した。出土遺物はＰ02からの中世土師器の細片１点のみである。建物の時期については出土遺物からは判断できないが、遺跡全体の出土遺物から中世後半期と思われる。

（２）土坑

ＳＫ07（第４図・第５図）　調査区南東に位置し、南側は調査区外に伸びている。規模は東西3.4ｍで南北２ｍ以上となる。平面形は方形を呈し、断面は壁が斜めに立ち上がった箱型の土坑で、深さは約60㎝を測る。覆土は上から暗褐色土（断－６）、地山質黄褐色土（断－８）、ブロック状地山質黄褐色土と礫を含む暗褐色土（断－９）である。底面は地山の黄褐色土層を掘り抜いて下層の礫層にまで及ぶ。

出土遺物は土師器皿（１～８）、白磁小坏（９）、瀬戸三足鉢（10）、越前甕（11）、珠洲擂鉢（12）、釘（13）で口径は１～６が69㎜～83㎜で８のみ95㎜と他に較べてやや大きい。藤田編年（注１）では１・２・４・７はＡタイプ、５・６はＥタイプであり、時期的にはおおむねⅣ期が中心になるようである。また３・８は京都系土師皿と思われる薄手の作りで、胎土は乳褐色である。９は二次加熱の痕がある。12は珠洲焼の擂鉢で口縁部には櫛目波状文を施し、幅広の端面が鋭い長三角形をなしており、吉岡編年（注２）によればⅤ期に比定すると思われる。

ＳＸ02（第４図）　調査区北東に位置する。規模は長径・短径がそれぞれ5.3ｍ・3.7ｍで幾つかの土坑が複合したような不整形な土坑である。２段の掘り込みがあり、深さは北東の浅くなっている部分で５～14㎝、南西の深い部分で20～30㎝ある。覆土は大小の礫が多く混じる暗灰褐色土～茶褐色土である。底は地山の黄褐色土を掘り抜いて下層の礫層にまで及ぶ。

出土遺物は土師器皿（14～16）、青磁香炉（17）、白磁碗（18）、瀬戸卸皿（19）、越前甕（20）、珠洲擂鉢（21）、用途不明の石（22）である。このうち土師器皿は口径74㎜～80㎜で14・16がＥタイプ、15がＡタイプである。時期はⅣ期である。17は香炉で筒形をなすものである。18は体部が直線的に開いて口縁部がやや外反し、口縁端部内面は口はげになっている。19は底面に回転糸切り痕がある。20は底面に静止糸切り痕が見られる。21は摩耗しているが一単位37㎜で10条の卸目がある。底面は静止糸切りでロクロから切り離す際の指痕が残る。22は流紋岩で火を受けた痕があり、表面の一部には擦痕が認められる。

ＳＸ03（第４図）　調査区北側、ＳＸ02の西側に位置する。規模は東西・南北の最長部でそれぞれ3.5ｍ・4.8ｍで、複数の土坑が重複したような不整形な土坑である。深さは北側部分が20～25㎝、西側及び南の細長く伸びている部分は約５㎝、中央やや南の窪みは約35㎝を測る。覆土はＳＸ02と同じく礫が多く混じる暗灰褐色土で、やはり底は地山の黄褐色土を掘り抜いて下層の礫層にまで及んでいる。

出土遺物は土師器皿（23）、白磁皿（24）、珠洲（25～27）、茶臼（28）、鉄製品（29・30）である。23はＡタイプである。24は二次加熱を受けた痕があり、灯明皿として使われた可能性がある。25は甕であるが遺存部が小さく口縁形態等は不明である。26・27は擂鉢で26は一単位30㎜に11条の卸目があり、底部は静止糸切り痕が残る。27は口縁部には櫛目波状文を施し、端面が肥厚して内側へ傾斜した三角頭をなす。卸目は31㎜に12条である。Ⅵ期に相当する。28は茶臼の下臼受け皿部分で、石質は安山岩である。当地域外で生産された可能性が高い（注３）。

（3）溝

ＳＤ01（第４図・第５図）　調査区の南西でＳＢ01の南側に位置し、東西方向に伸びている。西側は調査区外に西に向かって伸びている。南側では調査区壁際にコーナーが検出されており、溝は直角に折れる形で南側調査区外に伸びるものと思われる。検出部分の長さは約10.5m、幅約2.2m、深さ40cmで底の高低差はほとんどない。覆土は上から大きく黒褐色土（断－12・断－16）、暗褐色土（断－６・断－17）、黒色土（断－13）の順である。底は多くの礫で覆われている。

出土遺物は土師器皿（31～43）、青磁皿（44）、瀬戸（45・46）、越前甕（47・48）、珠洲擂鉢（49・50・51）、火打金（52）、釘（53・54・55・56）である。土師器皿については31～36のＡタイプと37～39・41・43のＥタイプ、40のＣタイプがある。時期は40がⅢ期で、その他はⅣ期が中心であろう。また42は薄手の乳褐色した胎土で京都系に類似する。45は洗で底面には回転糸切り痕が見られる。46は天目茶碗で体部がＳ字に屈曲している。47には「本」と格子状の刻印が押されている。48は壺を思わせるような小型の甕で、破損部断面に漆つなぎの補修痕が認められる。49・50は共に口縁部に櫛目波状文を施し、内端に深く広い面をとり外開きしているが、同一個体ではなさそうである。Ⅵ期に比定する。52は火打金で山型である。紐孔は確認できなかった。

ＳＤ03（第４図）　調査区西側中央にＳＤ01とほぼ平行に走る。検出部分の長さは約９m、幅約70cm、深さが６～20cmで東側が浅く、西側が深い。覆土は礫混じりの灰褐色である。

出土遺物は須恵器有台坏（57）である。混じり込んだものと思われる。

ＳＤ04（第４図・第５図）　調査区北西に位置しＳＤ03とは平行に走る。長さは約７m、幅は１～1.5mで東側が２条の流れに分かれている。深さは北東側の１条は６cm、その他の部分は概ね20～26cm。覆土は礫を含んだ暗灰褐色土である。

出土遺物は珠洲擂鉢（58）で、口縁部に櫛目波状文があり、面とりが痕跡化して端部は尖頭形を呈している。Ⅵ期に比定する。

（4）ピット

Ｐ07（第４図）　ＳＤ03とＳＤ04の中間に位置し、２つのピットの複合した楕円形である。長径約１m、短径約50cmで深さは北東のピットが約40cm、南西のピットが約50cmを測る。覆土はいずれも暗褐色土である。

出土遺物は土師器皿（59・60）で共に南西のピットから検出した。

Ｐ09（第４図）　ＳＤ04の南東に位置する。楕円形で長径約90cm、短径約70cm、深さ約10cmと浅い。覆土は暗褐色土である。

出土遺物は越前甕（61・62）で、いずれも体部の一部分のみであるが、61には格子状の刻印が、62には「本」と格子状の刻印がそれぞれ押されており、同一個体であると思われる。

Ｐ10（第４図・第５図）　ＳＫ05の南側に位置する。楕円型で長径約90cm、短径約70cm、深さ約25cmを測る。覆土は暗褐色土である。

土師器皿（63）が出土している。

Ｐ14（第４図）　ＳＤ02の南側東寄りに位置する。楕円形ピットで長径約26cm、短径約20cm、深さ約22cmを測る。

釘（64）が出土した。

（5）包含層の出土遺物

土師器皿（65～67）、瀬戸天目茶碗（68）、砥石（69）で、65～67は口径75～83mmでいずれもＡタイプである。68は底部外面に錆釉が見られる。69は仕上げ砥石で京都嶋滝（中山）産の石である。（注４）側面には切り出す時の擦痕が残っている。

（注１）本書の土師器皿タイプ・編年は藤田1997による。
（注２）本書の珠洲編年については吉岡1994による。
（注３）、（注４）畑内光次郎氏の御教示による。

土師器	皿	393
青　磁	碗	10
	皿	2
	香炉	1
計		13
白　磁	碗	1
	小坏	1
	皿	3
計		5
瀬　戸	碗	4
	盤・皿	5
計		9
越　前	甕	24
	壺	2
計		26
加　賀	甕	8
珠　洲	甕	5
	擂鉢	13
計		18
須恵器	坏	1
合　計		473

出土土器総破片数表

第４章　まとめ

今回の調査では総柱式掘立柱建物１棟と土坑10基・溝４条その他ピットを検出したが、これらから出土した遺物は若干の須恵器を除き、土師器皿や中世陶磁器でおおむね14世紀後半から16世紀の初め頃のものである。以下に調査によって検出・出土した遺構・遺物の特徴を示してまとめとしたい。

遺構中、掘立柱建物ＳＢ01と土坑群が検出されているが、加賀国の中世遺跡では一般的にこれらとともにセットで検出される井戸はここでは確認されなかった。またこれに関連してＳＢ01・土坑群と溝ＳＤ01ではほぼ同時期の遺物が検出されたが、時期的な前後関係は特定できなかったためこの溝の果たした役割は不明であるが、区画用の溝や生活用水として機能したと考えられよう。

出土土器については包含層を含む調査区全体からの数量を第１表に示したが、あくまでも破片資料により集計したものである。本調査区からは土師器皿が全体の80%以上を占め、その多くは口径65mm～95mmと小型のものであり、灯明皿として使用されたと思われる油煤痕の残るものもかなり存在する。また若干ながら京都系の土師器皿も確認されている。陶磁器では飲食器としての碗類は青磁碗を中心に瀬戸がこれに次ぎ、白磁が少量出土している。中国製と国産との数を比較するとほぼ３：１で中国製の方が中心を占め、国産品は補完的位置にとどまると言えよう。盤・皿類は碗類に較べて数が少なく、瀬戸・白磁・青磁の順で出土しているが、中国製と国産の比率はほぼ同じである。日常容器については、甕は越前・加賀・珠洲の順で北陸地方では標準的な産地のものが出土している。壺は数自体が少なく越前の破片が２つ（１個体）出土しているだけである。擂鉢については出土破片13点全て珠洲であり、他産地のものは見られない。以上飲食器や日常容器のような生活の必需品は一通り出土しているが、破片数は全体的にそれほど多くはなく実際の個体数（所有数）はかなり少なかったと思われる。また嗜好品用具や信仰用具としては青磁香炉と茶臼が出土しているが、これ以外の嗜好品用具の出土はなかった。

今回の調査区は小面積のため遺跡の性格について判断することは難しいが、出土遺物から考えると機能していたのは14世紀後半～16世紀と考えられ、冨樫氏の加賀守護時代とほぼ一致する。また冨樫館跡のすぐ東側に位置することから、この地区は冨樫館の周囲に広がる庶民が生活した居住区の一角であったと思われる。

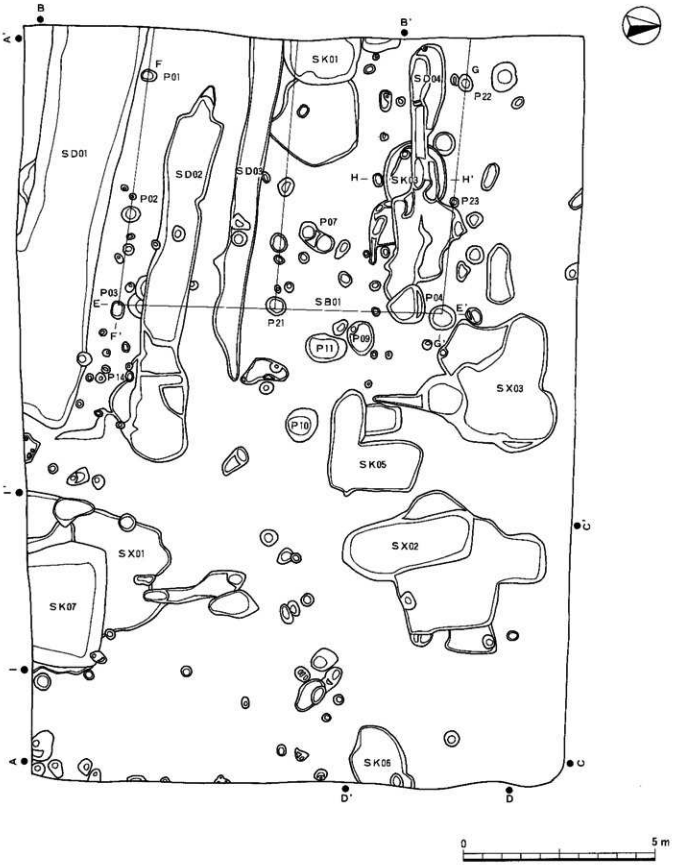
最後に、垣内光次郎氏（石川県埋蔵文化財センター）から出土遺物を中心に、遺跡全般にわたって貴重な御教示をいただき、また多くの資料提供を受けたが、担当者の力量不足のため成果を十分に生かすことが出来なかった。お詫びするとともに今後の調査に期することで御容赦願いたい。

参考文献

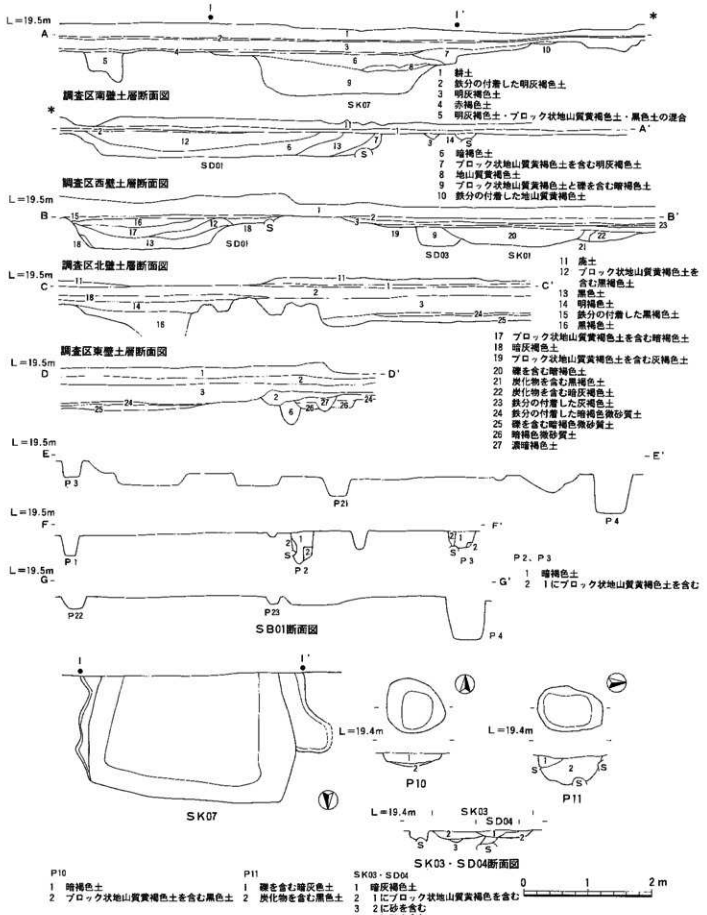
垣内光次郎・芝田　憍　1984年　『普正寺遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
金山弘明　1993年　『松任市橋爪ガンノアナ遺跡』　石川県松任市教育委員会
木田　清・前田清彦　1995・1997年　『松任市宮永ほじ川遺跡』　石川県松任市教育委員会
藤田邦雄　1997年　「中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸』　北陸中世土器研究会
北陸中世土器研究会　1993年　『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』
宮田進一他　1994年　『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告書』　富山県文化振興財団
吉岡康暢　1994年　「珠洲陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
吉田　淳　1998年　『冨樫館跡Ⅰ』　野々市町教育委員会

遺物観察表

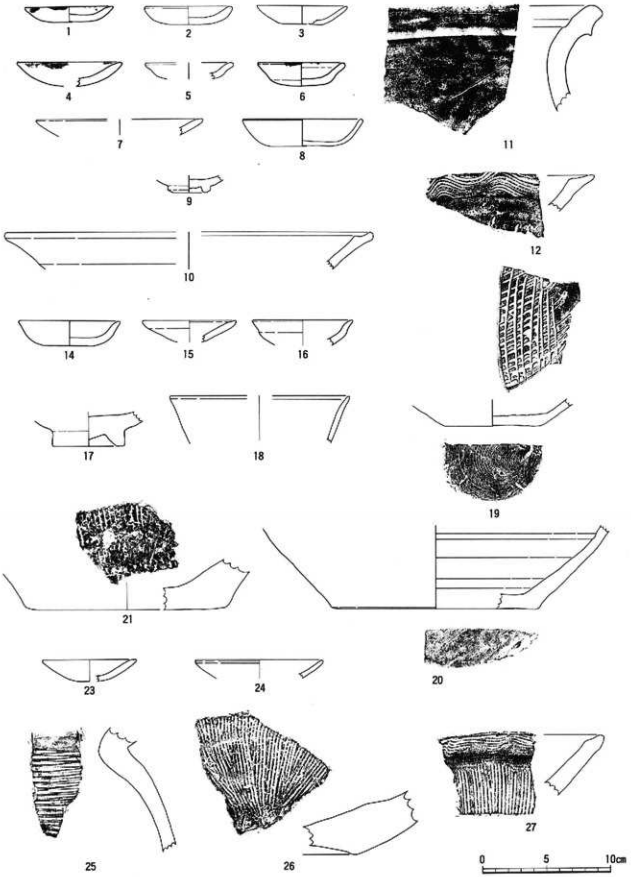
番号	出土地点	器種	産地	法　量（mm）	備　考
1	ＳＫ07	土師器皿	在地	口径70　底径25　器高12	油煤痕
2	ＳＫ07	土師器皿	在地	口径70　底径26　器高15	油煤痕（微量）
3	ＳＫ07	土師器皿	在地	口径71　底径30　器高14	
4	ＳＫ07	土師器皿	在地	口径83	油煤痕
5	ＳＫ07	土師器皿	在地	口径70	
6	ＳＫ07	土師器皿	在地	口径69　底径16　器高19	油煤痕
7	ＳＫ07	土師器皿	在地	（口径132）	
8	ＳＫ07	土師器皿	在地	口径95　底径22	
9	ＳＫ07	白磁小坏	中国	底径34	底部霞胎
10	ＳＫ07	三足盤	瀬戸	口径292	
11	ＳＫ07	甕	越前		
12	ＳＫ07	擂鉢	珠洲		
13	ＳＫ07	釘		長43　幅12　厚9　重2.8g	
14	ＳＸ02	土師器皿	在地	口径80　底径40　器高20	底部外面二次加熱を受ける
15	ＳＸ02	土師器皿	在地	口径74	
16	ＳＸ02	土師器皿	在地	口径80	
17	ＳＸ02	青磁香炉	中国	底径57	重ね焼きの痕あり
18	ＳＸ02	白磁碗	中国	口径143	
19	ＳＸ02	卸皿	瀬戸	底径77	
20	ＳＸ02	甕	越前	底径325	
21	ＳＸ02	擂鉢	珠洲	底径160	
22	ＳＸ02	石		長150　幅137　厚66　重2.05kg	用途不明
23	ＳＸ03	土師器皿	在地	口径79	
24	ＳＸ03	白磁皿	中国	口径101	
25	ＳＸ03	甕	珠洲		
26	ＳＸ03	擂鉢	珠洲		白色粒・礫を多く含む
27	ＳＸ03	擂鉢	珠洲		
28	ＳＸ03	茶臼		長98　幅48　厚30　重220ｇ	
29	ＳＸ03	鉄製品		長60　幅28　厚22　重29.7ｇ	
30	ＳＸ03	釘		長51　幅9　厚6　重3.3ｇ	
31	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径86　底径26　器高19	油煤痕
32	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径76	油煤痕
33	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径74	
34	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径84　底径24　器高15	
35	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径81	
36	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径92	油煤痕
37	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径74	油煤痕
38	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径65	
39	ＳＤ01	土師器皿	在地	（口径114）	
40	ＳＤ01	土師器皿	在地	（口径121）	
41	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径71　底径27　器高16	
42	ＳＤ01	土師器皿	在地	口径107	
43	ＳＤ01	土師器皿	在地	（口径169）	
44	ＳＤ01	青磁皿	中国	底径53	竜泉窯系
45	ＳＤ01	洗	瀬戸	口径194　底径102　器高48	重ね焼きの痕あり
46	ＳＤ01	天目茶碗	瀬戸	口径107	
47	ＳＤ01	甕	越前		11と同一個体の可能性あり
48	ＳＤ01	甕	越前		
49	ＳＤ01	擂鉢	珠洲		
50	ＳＤ01	擂鉢	珠洲		白色粒・礫を多く含む
51	ＳＤ01	擂鉢	珠洲	底径180	白色粒・礫を多く含む
52	ＳＤ01	火打金		長61　幅17　厚3　重5.4g	
53	ＳＤ01	釘		長42　幅10　厚5　重1.4g	
54	ＳＤ01	釘		長55　幅12　厚10　重6.6g	
55	ＳＤ01	釘		長126　幅24　厚18　重38.5g	
56	ＳＤ01	釘		長26　幅7　厚6　重2g	
57	ＳＤ03	有台坏		底径93	須恵器
58	ＳＤ04	擂鉢	珠洲		
59	Ｐ07	土師器皿	在地	口径86	
60	Ｐ07	土師器皿	在地	（口径122）	
61	Ｐ09	甕	越前		
62	Ｐ09	甕	越前		
63	Ｐ10	土師器皿	在地	口径75　底径19	油煤痕
64	Ｐ14	釘		長33　幅13　厚7　重26g	
65	包含層	土師器皿	在地	口径81　底径50　器高14	
66	包含層	土師器皿	在地	口径75	油煤痕
67	包含層	土師器皿	在地	口径83	
68	包含層	天目茶碗	瀬戸	底径60	
69	包含層	砥石	京都	長48　幅29　厚7	側面に擦痕あり



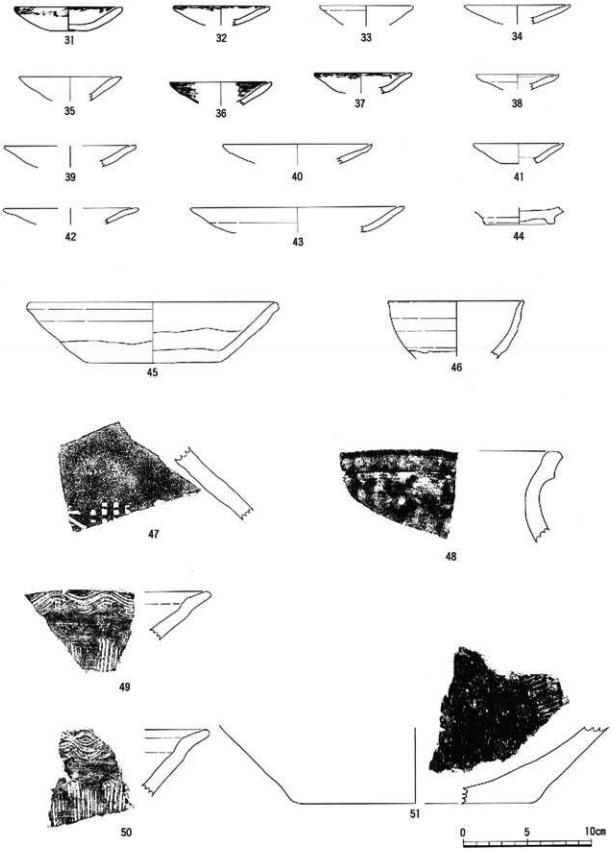
第4図　遺構全体図（1/100）



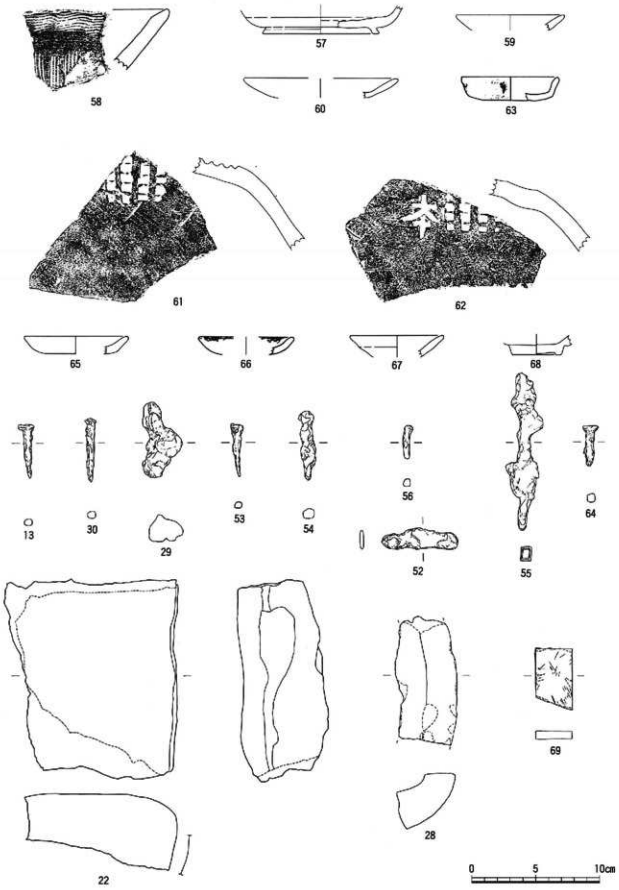
第５図　土層断面図・ＳＢ01断面図・ＳＫ07・Ｐ10・Ｐ11・ＳＫ03・ＳＤ04図 (1/60)



第6図　SK07（1～12）SX02（14～21）SX03（23～27）出土土器（1/3、20のみ1/6）

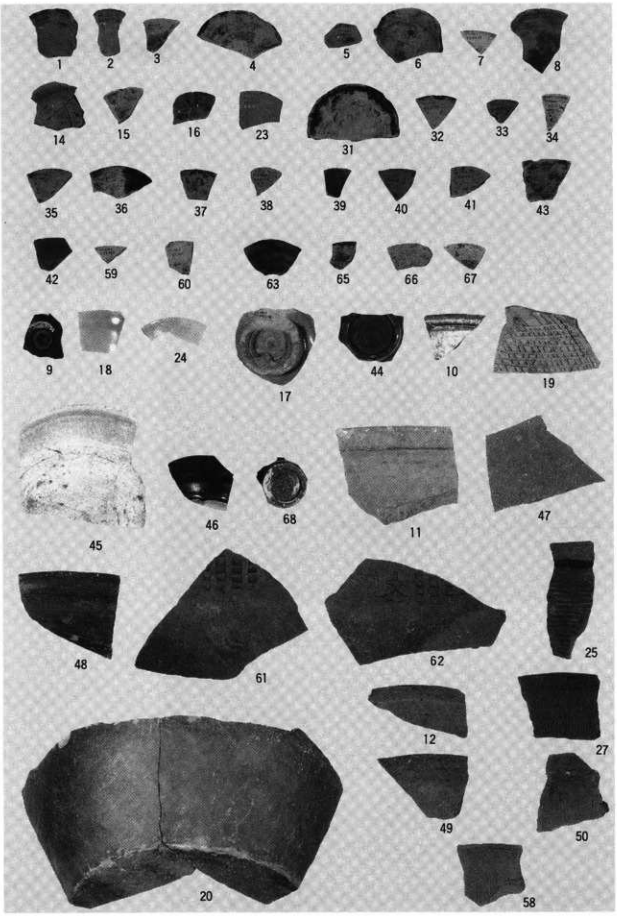


第7図　SD01（31～51）出土土器（1/3）

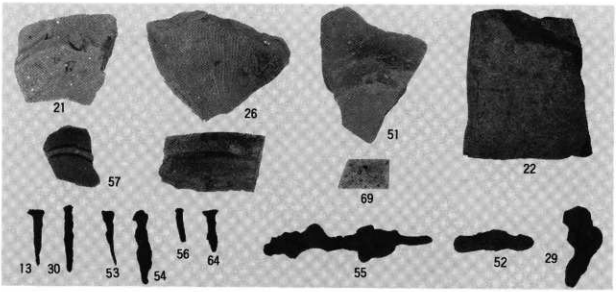


第８図　ＳＤ03（57）他 出土土器・鉄製品・石製品（1/3）

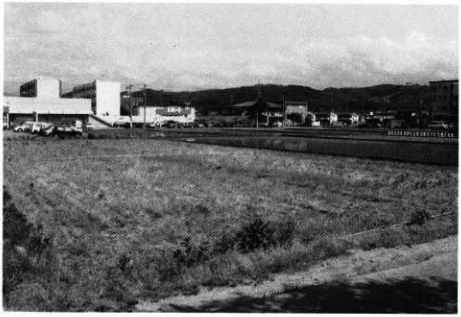
遺物写真1


1
2
3
4
5
6
7
8
14
15
16
23
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
43
42
59
60
63
65
66
67
9
18
24
17
44
10
19
45
46
68
11
47
48
61
62
25
12
27
49
50
20
58

遺物写真2



遺構写真1



調査前全景（北西より）

完掘全景（北西より）

ＳＸ02完掘（西より）

ＳＸ03完掘（北より）

ＳＤ01完掘（西より）

ＳＫ07完掘（西より）

遺構写真2

報　告　書　抄　録

ふりがな	とがしかんせき
書名	冨樫館跡 II
副書名	民間開発に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	永野　勝章
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	〒921-8815 石川県石川郡野々市町本町５丁目４－１　℡ 076-246-2344
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査 面積	調査原因
とがしかんせき 冨樫館跡	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 ののいちまちおうぎがおか 野々市町扇が丘	17344	16039	36度 31分 33秒	136度 37分 36秒	1998年5月8日 ～ 5月29日	300m²	民間開発に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
冨樫館跡	館跡	室町	掘立柱建物　1 土坑　10 溝　4	土師器皿 中世陶磁器	

冨樫館跡 II

1999年３月31日

編集発行　野々市町教育委員会

〒921－8815

石川県石川郡野々市町本町５－４－１

TEL076-246-2344

印刷　北國書籍印刷株式会社